

落書きと歴史

17 世紀に活躍したアンコール・ワットを参詣した日本人

石澤良昭（上智大学外国学部教授）

世界的文化遺産として有名なアンコール・ワット。その壁や柱の一部には、17 世紀前半に朱印船に乗り、ここを訪れた日本人による墨書跡が 14 ヶ所にわたり確認できる。その墨書の中でよく知られているのは、「肥州の住人藤原朝臣森本右近太夫一房」が父、儀太夫の菩提^{ぼだい}¹を弔い、老母の後生^{ごしょう}²を祈るため、はるばる数千里の海上を渡り、寛永 9 年（1632 年）正月にこの寺院に到来し、仏像 4 体を奉納した旨、12 行にわたり記されている。その父、儀太夫は加藤清正家の重臣であり、朝鮮の役で武勇を馳せた人物であったが、右近太夫がカンボジアへ渡航する前に改易^{かいえき}³間近い加藤家を辞し、肥前の松浦藩に仕官していた。

この時代の日本は 1603 年に徳川家康が江戸幕府を開き、朱印状が下付^{かふ}⁴され、海外との往来が盛んであつた。現在の東南アジア各地には日本人町が造られていた。当時のカンボジアではアンコール朝の末裔^{まつえい}チェイ・チェッタ 2 世（在位 1618～28）がプノンペンから北へ 40 キロのところのウドーン王都を造営していた。岩成成一著「南洋日本人町の研究」によれば、日本人町は現在の首都プノンペンと王都への交通路に当たるトンレサップ川を 26 キロさかのぼった河岸ピニャール（カンボジア語では「ピニャ・ルー」）の 2 ヶ所にあつた。両町を合わせて日本人はキリシタンを中心に 300～400 名以上であつたという。

¹ 死後の冥福のこと 三省堂 『大辞林 第二版』

² 死んで後の世に生まれ変わること。また、その世。来世。後世。来世で極楽に生まれること。来世の幸福。三省堂 『大辞林 第二版』

³ 〔改め易（か）える意〕 現任者を解職して新たな者を任ずること。中世以降、刑罰の一種と見なされるようになり、守護職・地頭職などの「職」の解任と所領の没収をいった。江戸時代には武士の所領や家禄・屋敷を没収し、土籍から除くことをいう。蟄居（ちつきよ）より重く切腹よりは軽い。三省堂 『大辞林 第二版』

⁴ 官庁から民間に金や物をさげわたすこと。三省堂 『大辞林 第二版』

日本人の墨書の記帳場所はワット中央部の十字型中回廊付近に集中している。ここは「プリア・ポアン（千体仏）という意味」と言って、大小いろいろな仏像が200体以上も安置されていて、現在でも参詣者の線香の煙が絶えない聖なる場所でもある。アンコール・ワットは12世紀前半にスールヤヴァルマン2世がヒンドゥー教ヴィシヌシン神のために建立した。しかし、その寺院は14世紀ごろから上座部仏教寺院に衣替えして存続していた。

17世紀に、ここを訪れた日本人は、この寺院がかつてインドに在った「^{ぎおんしょうじゃ}祇園精舎」⁵と思い込んでいたようであった。当時の日本人の地理感覚では現在の東南アジア等を「南^{てんじく}天竺」⁶（西川如見「増補華夷通商考」1708）と考えていた。祇園精舎については長崎の通辞⁷島野兼了が「祇園精舎の図」として持ち帰り、それが水戸市の彰考館に現存している。この絵図面はまさしくアンコール・ワットの図面であり、方泣・濠・回廊についての記述がほぼ一致している。また、右近太夫がかつて仕官していた松浦藩の松浦静山が『甲子夜話』（巻21の中に儀太夫の子・宇右衛門（右近太夫一房の俗名）が同寺の実測図を持ち帰ったと記している。

その右近太夫は帰国後どのような生涯を送ったのであろうか！これまで全く知られていなかった。最近、その子孫に当たる森本謙三氏（岡山県津山市在住）から連絡があり、そのご努力で菩提寺と父子の墓が発見され、いくつかの新史実が判明した。その墓は京都市の乗願寺であり、そこで儀太夫父子の墓碑と位牌が見つかったのであった。

その墓碑には「月窓院光誉道悦居士」

その位牌には森本儀太夫：慶安4年6月11日卒（1654）

森本左太夫：延宝2年3月28日卒（1674）

⁵ 須達（しゆだつ）長者が釈迦とその弟子に寄進した寺。中インドの舎衛（しやえ）城の南に旧跡がある。もと祇陀（ぎだ）太子の林園で、須達長者を給孤独（ぎつこどく）とも呼んだことから、祇樹給孤独園、略して祇園という。祇陀林。逝多林（せいたりん）。給孤独園（ぎつこどくおん）。三省堂『大辞林 第二版』

⁶ 日本・朝鮮・中国で、インドの古称。三省堂『大辞林 第二版』

⁷ 通訳。通訳をする人。特に長崎で通訳や貿易事務を行なった江戸幕府の役人。オランダ通詞と唐通事とがあった。三省堂『大辞林 第二版』

細川藩家臣森本儀十郎が寛永2年4月25日(1849)墓参り・墓修造

とある。しかし、ここからいくつかの問題点が出てくる。 墓碑と墓誌には法名のみ刻みこまれ、森本の名前記載なし。 位牌ではなぜ「左太夫」という名前になっているのか。 儀太夫から数えて8代目の儀十郎が175年ぶりになぜ合葬して墓を修造したのか、いくつかの疑問が浮かび上がってくる。

その右近太夫一房本人は、鎖国令前の慌ただしい雰囲気の中で帰国したようであった。その当時、加藤家は改易(1631)となっており、肥後(熊本)は細川藩に変わっていた。そして幕府のキリシタン弾圧が強化されていく中で、1633年には日本人の海外往来禁止令が出され、帰国者は極刑をもって迎えられた。

こうした時代環境が先の疑問の答えになるだろう。厳しい「鎖国(寛永)条例」から森本一族に、渡航歴取調およびキリシタンの疑いがかかるのを恐れたからであった。右近太夫は名前をあえて変える。それに加えて森本家の直系の親族が仕える細川家への配慮があったことは言うまでもない。右近太夫は父儀太夫と共に生誕の地、京都山崎へ移り住んでいたと思われる。当時、海外へ渡航した者が、鎖国という国の互い通行政策に対して、いかに世間をはばかり、渡航歴を隠さなければならなかったか。この史実からもうかがい知ることができる。鎖国政策が個人と、その一族に及ぼした影響は計り知れないものがある。詳細は今後の研究をお待ち願いたい。